

第
II
部

第一編 附屬圖書館

第一章 図書館

一 設置の背景

創立者井上円了は、哲学館創設当初から、研究のために古像、古書を収集する意図を持っていた（『天則』第一編第一二号「哲学館内ニ古像古書ヲ蒐集スル旨趣」、明治三三年二月一七日）が、明治二八（一八九五）年六月一日には「東洋学振興并図書館設立案」を発表し、「学校のみにて図書館なきときは、兵士ありて武器なく、銃砲ありて火薬なきか如く、学生たるもの研磨の功績を挙ぐるに甚た難ければ、学校図書館此二者相待ちて始めて東洋学の振興を見るべしと思ひます、是に於て余は哲学館附属として図書館を開設することを天下に表白致しました」と述べ、ついで西洋の図書館の歴史とその現状を説明、大学にとって図書館は必須、不可欠の存在であることを表明している（『東洋哲学』第二編第五号、明治二八年七月二日）。また、その当面の問題として予約募集中の黄檗一切経を購入するため募金を訴えている。この募金は、生前の香典といわれるように、死後の香典のかわりに生前の寄付金を懇願している（死後香典を謝絶するように遺言している）。図書館にかける覚悟の尋常一様でなかったことが窺い知られるのである。翌二九年六月八日に、井上円了は論文を提出して文学博士の学位を授与されている。哲学館同窓会はこれに応えて祝賀の宴を開催したが、この際、館主の宿意である、哲学館専門科および東洋図書館の設立事業を完成させるための寄附金の募集を行って

る(『東洋哲学』第二編第五号、六号、明治二十九年七月二日、同年八月二日)。

『東洋大学創立五十年史』(昭和十二年一月二三日刊)は、「爾来右の計画は着々進行せるを以て明治三十二年十一月講堂及図書館の建築起工を為し、翌二十三年五月に至り落成した。依つて五月十日、皇太子殿下御下御慶事の吉日を卜し開館式を挙行した」と記す(皇太子の御慶事とは、大正天皇のご成婚の日との伝承がある。また、昭和十二年刊行書にもかかわらず、皇太子殿下と記すのは、古い文献をそのまま使用したことを窺わせる。さらに、『官報号外』、明治三十三年五月一〇日の条に「宮内省告示第六号、皇太子嘉仁親王殿下今日婚礼ヲ済マセラル、明治三十三年五月十日、宮内大臣子爵田中光顕とある。したがって、文献的には孫引きではあるが史実の可能性はきわめて高い)。煉瓦造二階建、一七坪五合(約五七・七五平方米)。昭和四(一九二九)年六月図書館の新築とともに廃館となり、武道場・学友会・武器庫などに使用されたが、一二年八月一三日に取り毀し申請がなされ(『東洋大学百年史』資料編Ⅰ上、二八〇—一東洋大学校舎取毀認可申請書)、同年一〇月一日認可され取り毀された(同書二八〇—二東洋大学校舎取毀認可書)。これが最初の独立棟図書館である。

第二回目の図書館建設は、井上円了の奇行ともいえる生前の香典募集とか、大学教育にとって図書館は不可欠とする信念に基づくものと異なり、旧制大学令による大学昇格に伴う、監督官庁の条件とも申すべきものであった。『東洋大学報』一号(昭和四年十一月)には「即ち校舎の増築・図書館の建築・並に講堂の建設を更に図書館の充実である」と記されているが、大学令による大学に昇格のためには旧施設・設備がいかに不十分なものであったか、察するに余りあるものがある。

同学報同号によると、図書館閲覧室および書庫建築予算九万五二二〇円を、昭和三年七月一四日開催の財団維持員会に提案し決議を経て、同三〇日指名入札、銭高組東京支店が落札、同年八月五日起工、四年六月一〇日竣工、同一八日引渡しとなっている。鉄筋コンクリート造三階建、一階一一〇坪五合(約三六五・二八平方米)、二階同面積、中二

階四二坪五合(約一四〇・二五平方米)、地階一一五坪六合(約三八一・四八平方米)、延べ三七九坪一合(約三二五一・〇三平方米)、他に書庫一二七坪五合(約四二〇・七五平方米)、一〇万冊の収容能力を有する図書館であった。

この図書館は、当時の記録に書架は最新式の鋼鉄製であるとか、閲覧室は天井が高く快適であるとかその特徴が述べられているが、「図書館閲覧室及書庫」と謳われているのは、閲覧室部分と書庫部分とが鉄扉その他鉄製建材で完全に遮断されているからであり、書庫部分の窓には鉄製の鍍戸が装着されているからである。これが戦災に際して威力を発揮するのである。

二 創立八〇周年記念図書館の建設

収容能力一〇万冊と称する図書館も、戦後の各学部・学科の新・増設による図書の増加によって、書庫は狭隘を極め、あふれた図書は図書館の内・外七個所に分散して所蔵し、閲覧室は常に満員であった。したがって、図書館は機能麻痺の状態に陥っていたのである(第一一回図書館建設準備委員会議事録、昭和四二年二月一二日)。

そのため、新図書館建設への発議となり、創立八〇周年記念事業の一環として、昭和四〇(一九六五)年六月九日に「図書館建設準備委員会」が発足し(『図書館ニュース』七号、昭和四二年一月一〇日)、委員長には園田義道図書館長が就任、委員会は各学部教授会代表ならびに教務部長、総務部長、経理部長の一五名で構成された(『図書館ニュース』創刊号、昭和四二年六月一日)。

そこで検討されたのは、利用者数の増大と蔵書の膨張に対応しつつ、大学設置基準(席数学生数の五パーセント)を上回る機能的な図書館であり、具体的には次のとおりであった。

一 図書館の現状分析

一 図書館の未来像

一 大学図書館設置基準より見た新図書館の必要面積の算定と施設・設備の検討

一 立地条件の検討

一 図書館機能と利用の検討

一 建設予定地の検討

一 他大学の新築図書館の調査

一 建築予算の検討

一 工学部建築学科より示された基本計画および基本設計の検討

昭和四二年九月二四、二五両日にわたって講堂裏の土地が購入され、図書館用地とされた。面積一二二八・四八平方メートルと二九五・八一平方メートル、計一五二四・二九平方メートル〔登記申請書「東京法務局文京出張所」〕。しかし、この候補用地に反対の議論がなかったわけではない。大学のキャンパス最南端に位置し、立地条件が最悪と見られたからである。図書館に行くことが目的で大学に来たものだけが歩を向ける所としか見えなかった。ところが、都営地下鉄三田線の開通予定が伝えられるに及び、逆に多数の学生が図書館を通らずには学内に入れなくなる見通しとなった。設計者は図書館のピロティ部分を学内への通路とするように提案した。

土地問題は解決したが、大学紛争の最盛期に遭遇し、その一連の動きとして図書館建設反対運動が起こり、計画の実現には困難を極めた。委員会は再三教授会の意見を徴し、大学は設計図などこの概要を公示し、学生個々の意見を反映させるため提案箱を設置したりした〔『東洋大学報』七号一九七〇年五月二五日、『東洋大学広報』四三号、昭和四五年

七月一日。

建築費用 三億三〇〇〇万円（内部の書架、閲覧机等の附属設備・備品等の購入を除く）

昭和四五年七月一五日着工

同四六年六月二〇日竣工

設計監理 東洋大学工学部建築学科平山（嵩）研究室

施行 鹿島建設株式会社

床面積 地階二二三・四〇九平方米、中地階四八・〇八二平方米、一階五二三・七四九平方米、二階九九一・三七三平方米、三階一〇二一・四〇八平方米、四階一〇三〇・四一八平方米、書庫一八〇四・四一〇平方米、塔屋四一・四五〇平方米、エレベーター機械室一六・〇〇〇平方米、ピロティ四九七・六五九平方米、合計六一九七・九五八平方米

収容冊数 四二万冊

席数 一〇〇〇余席

〔『東洋大学図書館』開館披露用パンフレット、前掲東洋大学報四三号〕

全館空調であり、閲覧室その他の床に絨毯を敷くことにより、履き物の衝撃音を防ぎ、静粛を保つことができるように工夫されている。図書館建設準備委員会発足より六年を閲してようやくその完工を見たのである。

七、八月の夏季休暇中に移転を行い、九月一三日に開館。一二月四日に落成式を行った。その際に、前記開館披露用パンフレットと本館所蔵の貴重書『松姫物語』の複製色紙（文学部大島建彦助教授（当時）解説）を配布した。六月竣工、九月開館。それにしても一二月の落成式は異常である。これもまた、烈しい大学紛争の結果であった。

落成式前の一二月一日、文部省より係官とともに四名の視察委員が来館したが、建物への称賛の声が多かったという（『東洋大学広報』六三号、昭和四六年一二月一五日）。

視聴覚室は、四階の一隅に部屋のみ確保されたが、ただちにオープンするには至らなかった。四八年七月二日、六〇〇万円の費用をかけて開室となった。ここに、伝統的な文献のみの図書館から他の媒体をも活用する図書館へと発展した（『コスモス』二二号、四八年七月五日）。

困難を極めた第三回独立棟図書館はここに完成を見たのである。

これをもって図書館の器に関する諸問題が抜本的に解決したわけではない。書庫は着工時一〇年間の余裕しか見込まれていなかった（累年増加冊数参照）。四階建ではあるが、五階に嵩上げ可能の構造となっており、用地買収ができれば、東側と西側にも増築可能な構造となっていたが、これらはいずれも沙汰止みとなった。嵩上げについては、日影法という建築法規の改訂がこれを不可能にしたといわれている（『昭和五五年度第五回図書館運営委員会議事録』昭和五六年一月二三日開催）。

この問題は現行の白山再開発計画の具体化により、発展的解消を見ることになろう。

昭和四年の旧図書館は、九号館と改名し、短期大学の研究室・事務室として使用していたが、平成二年六月七日取り毀された（『登記申請書』東京法務局文京出張所）。

三 戦時下における蔵書の保全

第二次大戦当時図書館員は若干の移動こそあれ、岩本末子司書が唯一人であったことが多く、戦争の苛烈に伴い、責任は重く業務はきわめて多端であった。

特別高等警察（特高）は大学の蔵書のうち、反国体的なものに目をつけ、その提出を求め、聖書の類まで問題にした

ことさえあった。岩本司書は、その種の圖書を特高の目に触れない所に隠し、提出を免れることができた。今日、高島素之沢の資本論、津田左右吉の著書などが残ったのは、この際の配慮による。

大戦末期、本土への米空軍の爆撃が激しく、大学も焼夷弾の雨にさらされることになった。閲覧室に落ちた焼夷弾を、身を挺して消しとめて事なきを得た時もあり、また周囲が一面の火の海となり、図書館の地下にも火が入り、鍋のように、下からも周囲からもあぶられるような状態になったこともある。この時、岩本司書と当時学生で協力を惜しまなかった和田吉人社会学部名誉教授は、書庫の鑑戸を全部締め、外部の火を防いだ。また扉を開くときはきわめて慎重に、火災後数日を経過して、書庫内の熱気のを待って開いた。これは、内部に熱のあるとき、新しい空気に触れて火を誘発した他の図書館の実例を知っていたからである。

本学においてかつての備品で、今日に残るものがきわめて稀ななかで、図書のみ昔日のままで、現有するのは、岩本、和田その他図書館に勤務していた方々のこうした細心の配慮と努力の賜物である（以上和田名誉教授よりの聞書）。

四 図書館の近代化と現状

昭和二十四年三月、本学は新制大学に移行した。その頃、図書館近代化の気運はその管理と資料の整理の両面において実現され、後の図書館発展の基礎的理念を提供することになった。その中心となったのが和田吉人名誉教授である。

一 東洋大学の圖書のすべてを図書館の管理下に置いたこと（このことは、後に前進と後退を繰り返し、不明確なまま今日に至っている）

二 館長の選任を教授会の公選によるよう決めたこと（これは、後に学長の委嘱に変更されたが、「東洋大学附属図書館

長選任に関する規程」(昭和五二年一月一六日施行)により、また公選制となった)

三 司書の資格を明確化したこと

四 図書館業務を総務・整理・奉仕の三部門に分掌すること

である。この中で司書の資格の明確化は、当時、他の大学ではまったく行われていなかった。その後「東洋大学附属図書館司書職員任用選考委員会規程」(昭和四一年七月一三日施行)となつて規程化されたが、実際は空文のまま今日に至っている。

業務分掌については、「東洋大学附属図書館事務分掌細則」(昭和四一年一〇月五日施行)により、図書課と整理課の二課制となり、図書課は総務・閲覧の業務を分掌し、整理課は整理業務のみを分掌するようになった。六〇年四月一日付の改正により、図書課は総務と整理、閲覧課は閲覧業務を分掌するように改められた。ただし、この三業務が図書館の三大業務であるとの基本的考え方は不変である。

また資料の整理の方面では、

一 分類法は、和漢書・洋書ともに標準分類法として編纂された森清編『日本十進分類法』を採用した。従来は圖書を到着順に配架していたのを改め、書架分類を必然的にし、出納式より開架式に進めることを企図していたが、現在もその方向性は不変である。標準分類法の採用は、図書館間の相互協力を前提としたものであったが今日では、複写機の発達とともに互恵的な文献複写等は日常化し、図書館間の圖書の貸出(インターライブラリ・ローン)も頻繁に行われている。

二 目録法も分類法と同じく、和漢書・洋書ともに『米国図書館協会の著者・書名記入の目録規則』(American Library Association: A. L. A. Cataloging rules for author and title entries, 2d ed., 1949.) 同く『米国の議会図書館の記述

目録規則』(U. S. Library of Congress: Rules for descriptive cataloging in the Library of Congress, 1949.) を若干変更して採用した。米国の目録規則を採用するに際し、当時入手が困難だったために占領軍に依頼して取り寄せたりした。今日においては、日本図書館協会『日本目録規則』一九五二年版、一九六五年版、新版予備版、『英米目録規則』北米版(American Library Association: Anglo-American cataloging rules, 1967. North American text.) 同第二版 (2d ed., 1978.) をも参考にしてゐる。

三 件名は『日本件名標目表』を若干改善して採用した。今日においては、本表の延長線上にある『国立国会図書館件名標目表』を主として使用している。

四 目録の編成は、和漢書・洋書とも一本で、辞書体目録と分類目録の双方を編成することにした。辞書体目録とは、著者・件名・書名の各方面から図書を検索することが可能な、最も完備した目録である。わが国においては、戦前・戦中を通じて、文献的には紹介されていたが、試みられたことはなかった。東洋大学は日本最初の辞書体目録を持ち、今日に至っている。

これらの改革は、社会的に公開されたところに特色がある。『東洋大学図書館学講座史』(昭和五〇年一二月二五日刊)は、図書館改革と、昭和二五年から始まる「図書館学講座」との関係については、特に言及していないが、改革と講座とは表裏一体をなしていたのである。

五 所蔵図書の増加

戦後新制大学となつてからの著しい発展(学部学科の増設・大学院の設置)に伴い、年々多量の図書が購入され、また篤志家の寄贈図書もあつて、順次蔵書が増加してきている。その経過を累年増加冊数で示すと次のようになる。

累 年 増 加 冊 数

年度	和漢書	洋 書	計(総冊数)	年度	和漢書	洋 書	計(総冊数)
大正14年	5,813	273	6,086	昭和32年	42,896	9,470	52,366
15年	9,616	569	10,185	33年	60,579	13,456	74,035
昭和2年	10,232	2,009	12,241	34年	66,949	17,192	84,141
3年	13,474	2,202	15,676	35年	71,632	19,357	90,989
4年	14,774	2,470	17,244	36年	75,483	20,682	96,165
5年	20,905	2,668	23,573	37年	80,371	23,805	104,176
6年	22,191	2,959	25,150	38年	87,785	27,066	114,851
7年	22,601	2,984	25,585	39年	94,096	28,612	122,708
8年	23,078	3,058	26,136	40年	105,579	46,646	152,225
9年	23,552	3,125	26,677	41年	123,029	54,785	177,814
10年	24,214	3,225	27,439	42年	135,039	60,629	195,668
11年	24,672	3,235	27,907	43年	144,585	65,054	209,639
12年	25,051	3,237	28,288	44年	156,287	70,082	226,369
13年	25,776	2,241	28,017	45年	165,242	76,023	241,265
14年	26,565	3,262	29,827	46年	171,584	81,542	253,126
15年	27,059	3,263	30,322	47年	181,009	87,552	268,561
16年	28,006	3,301	31,307	48年	190,698	93,194	283,892
17年	29,219	3,338	32,557	49年	198,694	98,938	297,632
18年	30,282	3,496	33,778	50年	207,199	104,276	311,475
19年	30,726	3,532	34,258	51年	239,115	109,937	349,052
20年	30,934	3,536	34,470	52年	248,515	117,287	365,802
21年	31,118	3,588	34,706	53年	260,135	123,387	383,522
22年	31,310	3,590	34,900	54年	272,214	128,723	400,937
23年	31,648	4,024	35,672	55年	285,054	132,997	418,051
24年	31,834	4,024	35,858	56年	295,854	137,467	433,321
25年	33,826	4,175	38,001	57年	307,050	142,457	449,507
26年	34,522	4,687	39,209	58年	316,058	147,742	463,800
27年	34,840	4,983	39,823	59年	333,221	153,663	486,884
28年	35,561	5,373	40,934	60年	344,193	158,952	503,145
29年	38,897	6,174	45,071	61年	355,331	163,561	518,892
30年	39,441	6,683	46,124	62年	366,735	168,742	535,477
31年	40,665	7,725	48,390				

(51年以降は「哲学堂文庫」を含む冊数である。)

1 哲学堂図書館図書

この五三万余冊の中には、昭和二八年一月一日に寄託された、創立者井上円了博士の隠棲地哲学堂の図書館蔵書二万一五六〇冊が含まれている。子息井上玄一氏によって哲学堂が東京都に寄贈されてから、図書は全く死蔵状態になつていた。そこで当時の大塚又七理事長は東京都当局に働きかけた。

(一) 井上円了蔵書は東洋大学に縁の深い図書群であること

(二) 現状では単なる死蔵に過ぎないこと

(三) 東洋大学でなければ、この図書を有効利用する大学はないこと

などを力説し、都の民生局長であつた磯村英一元学長の尽力もあり、本館への寄託となつた。和田吉人名誉教授の言によれば、寄託の条件には、

(一) 井上円了研究の資料とすること

(二) 明治文化研究の資料とすること

などがあつたようである。しかし、実際はわが国の伝統的学問の研究資料としての価値の高いものである（『図書館ニュース』第九号、昭和四三年四月一〇日）。この図書群は、五〇年七月一〇日東京都から無償譲与を受け名実ともに本学の有に帰した（『コスモス』三〇号、一九七五年一〇月一〇日）。

2 個人文庫の設置

文庫とは、特定の目的または一定の主題・形態・時代に基づいて収集され、コレクションとして価値を生ずる纏ま

った文献と定義されるが、貴重書・準貴重書の場合は三〇点以上、団体・個人の旧蔵書の場合は一〇〇〇冊以上の纏まった文献を、その道の専門家の意見を聞いて認定することになっている（東洋大学附属図書館文庫取り扱い基準、昭和六〇年四月一日制定）。

故人となった教授・校友所蔵書を一括購入した主要な文庫

昭和二八年 戸田文庫——三七七八冊（社会学・歴史学関係図書、古文書） 故戸田貞三教授旧蔵書

昭和三〇年 寺田文庫——約六〇〇〇冊（法律学、主として商法関係図書） 故寺田四郎教授旧蔵書

昭和四〇年 坂崎文庫——約六〇〇〇冊（哲学・自然科学関係） 故坂崎侃教授旧蔵書。「坂崎文庫目録」平成元年二月二

八日刊。

昭和四一年 重松文庫——約八一〇〇冊（漢籍、仏教書、東洋関係洋書） 校友九州大学名誉教授故重松俊章旧蔵書（貴重書を含む）（『コスモス』九二号、一九九一年一月一〇日）

寄贈された文庫（主要なもののみ）

昭和一四年 清朝実録二部（各部一一九二冊） 故小野玄妙教授寄贈（『図書館ニュース』一〇号、昭和四三年

六月二〇日）

昭和三四年 二月一六日 和・洋書三二五九冊（各種） 中小企業政治連盟寄贈

昭和三六年 四月二一日 中国書一〇五五冊（各種） 中華民国駐日大使館寄贈。呉主惠名誉教授仲介。

昭和三八年 八月 七日 和漢書（漢学関係）約三〇〇〇冊 故柴田甚五郎教授旧蔵。遺族寄贈

昭和三八年 八月 七日 四部叢刊（漢籍）二二〇三冊 渋沢敬三氏寄贈

昭和四二年 二月一〇日 中島文庫 約二〇〇〇冊 元学長故中島徳蔵旧蔵。遺族中島桜氏寄贈。「中島徳蔵先生寄贈
圖書目録」昭和四五年三月三十一日刊

昭和四五年 二月 宇野文庫 一二八七冊 卒業生故宇野脩平東京女子大学教授旧蔵。遺族寄贈。「宇野脩平旧
蔵書目録」昭和五七年一月二十五日刊。

昭和四八年 六月二三日 湯本文庫 二三八点(一〇五八冊) 故湯本武比古京北中学校長(大正一二年学長事務取扱)
旧蔵(『コスモス』二三号、一九七三年一〇月三〇日)。「湯本文庫目録」昭和六二年一月三〇日刊

昭和五一年 九月 風岡文庫 和書一四〇三冊、洋書四六一冊、雜誌二八種 故風岡浩教授旧蔵。遺族寄贈(『コ
スモス』三五号、一九七七年一月二五日)

昭和五四年 七月 龍山文庫 和漢書一一九〇冊、洋書一〇五三冊、雜誌二四種(約三〇〇〇冊) 故龍山義亮
教授旧蔵(貴重書を含む)。遺族寄贈。「龍山文庫目録」昭和六〇年一月二五日刊(『コスモス』五七号、一九八二年三月

三十一日、同誌六八号、一九八五年一月一五日)

昭和五九年一月二八日 杖下文庫 和漢書四六〇二冊(中国哲学主体、雜誌六九種 故杖下隆之名誉教授旧蔵。遺族
寄贈。「杖下文庫目録」平成二年一月三二日刊(『コスモス』六四号、一九八四年一月一〇日、同誌九一号、一九九〇年一
〇月三〇日)

3 貴重書

貴重書は、戦火をまぬがれて今日に至るものも少なくない。また、戦後購入・寄贈などにより本学の有に帰したも
のもある。次にその目録を列挙するが、「東洋大学附属図書館貴重図書指定基準」により指定されたもののみである。

和漢書

書名	巻冊	著・編筆者	刊行年代	備考
秋月 雨やとり	一〇冊		寛文（一六六一―七二）頃	奈良絵本 No. 11 *
天稚彦	三冊		寛文延宝（一六六一―一八〇）頃	写本 No. 99
粟田左府尚齒会詩	三冊		江戸初期	写本 No. 64
あやめのまへ	一巻	藤原在衡編	鎌倉末期	卷子本 写本 No. 75
ちやうこんか	三帖		室町中期	絵巻物 No. 7
勅撰名所和歌抄出	二冊	宗碩編	貞享（一六八四―八七）頃	奈良絵本
大毗盧遮那佛神變加持經	七帖		永正四（一五〇七）	槐陰都人写
大乘玄論 五卷		隋吉藏撰	嘉吉一（一四四一）	折本 東寺西院
詠歌大概	一冊		永仁三（一二九五）	未装订
殿中十五番御歌合	一冊		江戸期	写本
惠慶集	一冊	惠慶	江戸初期頃	写本
圓明房月前閑談詩	一冊	大江以言	一二〇七―三一	尊圓法親王写 卷子本
風葉和歌集	一冊		寛政八（一七九六）	酒井忠举写
藤川百首	一冊	藤原定家	江戸初期頃	（忠度百首と合冊） 写本
源氏不審抄出	一冊	飯尾宗祇		宗碩手写
源氏物語 鈴虫	一帖	紫式部	室町期	写本
源氏物語	五四冊	紫式部	文祿五（一五九六）頃	写本

源氏物語	玉かつら	乙女
源氏物語	はゝき木	
源氏大鏡	一冊	紫式部
源氏大鏡	一冊	紫式部
源歌抄	三冊	紫式部
源三位頼政集	一冊	無念庵主
御水尾院御製集	一帖	源頼政
御撰和歌集	一冊	御水尾天皇
通照發揮性靈集	一〇帖	空海
日吉社歌合	一卷	藤原知家
百鳥図	二卷	
百人一首改観抄	六冊	契沖
百人一首かるた	取讀 ○○枚	
百人一首かるた	取讀 ○○枚	
百人一首かるた	取讀 ○○枚	
百人一首かるた	一枚	田山敬儀
百人一首歌かるた雙陸	三冊	心敬
百首和歌	一卷	
伊吹とうし	三卷	
稻生物怪録	三卷	
伊勢物語	一帖	

元中九ノ永享一	(一三九二) 四二九)	畠雲山人明魏写
鎌倉中期		伝阿佛尼写
元禄(一六八八—一七〇三)	頃	写本
元禄一四(一七〇一)		刊本
寛文(一六六一—一七一)	頃	無念庵主写
元禄(一六八八—一七〇三)	頃	写本
室町中期頃		藤原定家写
延宝九(一六八一)		粘葉装
江戸末期		卷子本 雲竹写
延享五(一七四八)	序	卷子本 写本
江戸明治初期頃		勝村治右衛門
江戸期		写
江戸期		写
宝暦九(一七五九)		長谷川新兵衛
文政五(一八二二)		川村利助
室町中期頃		卷子本 写本
江戸初期		絵巻物 写本
天保一(一八三〇)	頃	絵巻物 写本
江戸初期		写本

No. 2

No. 5

No. 10

伊勢物語	一帖		室町末期頃	粘葉装	写本	No. 84
伊勢物語光廣卿御聞書	二卷	水無瀬氏成	寛永(一六二四—三八)頃	卷子本	光廣写	
伊勢物語肖聞	一帖	肖柏	室町末期	粘葉装	写本	
順徳院中殿御會和歌	一冊		江戸初期頃	写本		
神楽謡	一帖		室町時代	折本	伝後奈良院宸筆	
漢孔廟禮器碑	一帖			折本	拓本	
歌仙家集	一五帖	藤原公任編	正保四(一六四七)	鹽興堂中野小左衛門	写本	
歌仙家集補	三冊	富士谷成章	江戸中期頃	写本		
嘉承二年記	一卷		明応九(一五〇〇)	卷子本	柳原廣光写	
建禮門院右京太夫集	一卷	建禮門院右京太夫	室町初期頃	卷子本	写本	No. 70
金葉和調集	一帖	源俊賴編	室町時代頃	伝東野州常緑写	写本	
金葉和調集	一帖	源俊賴編	室町中期頃	伝姉小路基綱写	写本	No. 9
金葉和歌集	一帖	源俊賴編	文明(一四六九—八六)頃	奈良絵本	写本	No. 62
小萩かもと	一帖		江戸初期	尊澄(宗良)親王写		
古今和歌集	一帖		元弘(一二三二)	伝中山定親卿写		
古今和歌集	一帖		室町期頃	伝二條為世写		No. 76
古今和歌集	一帖		鎌倉末期	伝冷泉為秀写	写本	
古今和歌集	一帖		南北朝頃	写本		
金剛頂一切如来真實摂大乘	三帖		鎌倉末期	折本	東寺西院	
現證大教王經	二帖		文安一(一四四二)	奈良絵本	居初氏女写	No. 80
小式部	一冊		江戸初期	写本		No. 85
くしき志くしき集語	一冊		江戸期頃	絵巻物	尋貞写	No. 1
松姫物語	一卷		文永六(一二二六)			

名所便覧	三冊	小沢玄仲	江戸期	写本
名所和歌	一冊		室町末期	写本
目覚し草	二冊	烏丸光広	慶安二(一六四九)	杵田勘兵衛
虫之歌合	一卷		江戸期	卷子本 写本
長方卿集	一軸	藤原長方	慶長三(一五九八)	上卷欠本 藤原為満写
二鉢節用集	三冊		寛永六(一六二九)	たひらのますたか写
おちくほ	一冊		明和三(一七六六)	No. 100
おちくほ物語	四冊			写本
落くほ	六冊		慶長・元和(一五九六—一六二三)	写本
おちくほのさうし	二帖		江戸初期	奈良絵本 写本
大江元就集	一冊	毛利元就	江戸中期	写本
大江山記	二卷		江戸初期頃	卷子本
小倉山庄色紙和歌	一冊	藤原定家撰	江戸初期頃	俊長房写
小倉山庄色紙倭歌	一冊	猪苗代兼載	延宝九(一六八一)	写本
小倉山庄色紙和歌註	一冊		萬治三(一六六〇)	写本
をこぜ	一卷		江戸初期	繪巻物 写本
女要小倉文臺	一冊		文化八(一八一二)	塩谷平助
羅しやう門	二帖		江戸初期頃	奈良絵本 写本
羅生門	一冊		寛永一四(一六三七)	No. 87
六家抄	一冊	肖柏編	江戸初期	写本
西行記	九冊		寛文(一六六一—七二)頃	奈良絵本 写本
さごろも	四冊		古写本	

西行一代記	一冊	寛文一三（一六七三）	松會版	No. 71
西行物語絵詞	一卷	江戸期頃	卷子本 写本	
山家抄	一冊	江戸期	写本	
山家集	一冊	文禄三（一五九四）	玄旨手写	
「三寶繪詞」断簡	一軸	保安一（一一二〇）	伝源俊頼写	No. 72
三夕	一冊	江戸末期頃	三曙と合冊 写本	
小夜衣	三冊	寛永寛文頃	写本	
枕草子	七冊	江戸初期頃	写本	
潜確居類書	六八冊	明刊		
釋阿之賀之記	一帖	明応二（一四九三）	別書名は俊成卿九十賀記 写本	
詞花和歌集	一冊	天正三（一五七五）	写本	No. 89
新勅撰和歌集	一冊	室町期頃	写本	No. 98
新增書籍目録	三冊	天和一（一六八一）序	山田喜兵衛	
私撰不見世友	一冊	江戸末期頃	本居内遠写	
蕉翁句解過去種	四冊	江戸中期	写本	No. 68
拾異類編	一〇冊	貞享五（一六八八）	田口仁兵衛	
酒傳童子繪	五卷	寛永年間（一六二四—四三）頃	絵巻物	
集雜書	一冊	室町期頃	写本	No. 12
蘇悉地羯羅經	三帖	嘉吉年間（一六二四—四三）頃	折本 東寺西院	
艸山元政上人之書翰	一卷	正保一—慶安一（一六四四—四八）頃	卷子本	
すみよし	三冊		雲元政自筆写	

平忠度朝臣集	一帖	平忠度	寛文(一六六一—七二)頃	写本
定家卿詠	一冊	藤原定家	文明一三一—永正六 (一四八一—一五〇九)?	飛鳥井宋世写?
輟畊録 三〇卷	八冊	元陶宗儀	至正二六(一三六六)序・ 成化五(一四六九)後印本	写本
東波五百言	一冊	一條兼良	江戸初期頃	大虚手写
東齋隨筆	一冊	一條兼良	延徳三(一四九一)	奈良絵本
つれづれ草	五帖	吉田兼好	江戸初期	絵巻物
鶴亀雙紙	二卷		江戸期	写本
宇津保	二〇冊		江戸初期頃	写本
和歌題林抄	一冊	一條兼良	室町時代頃	写本
和歌秘術	一冊	藤原家隆	室町末期頃	和歌口傳と合冊写本
和漢朗詠集	二帖	藤原公任	康安一(一三六一)	折本 写本 No. 4
和漢六部抄	一冊		江戸初期頃	写本
和歌三部秘抄	一冊		江戸初期頃	写本
楊貴妃物語	一冊		江戸初期頃	写本
よときのさうし	一卷		江戸期	絵巻物 写本
幽斎道之記	一卷	細川藤孝	江戸記	写本
禪宗無門關	一冊	宋慧開	寛永五(一六二八)	古活字版

洋書

Académie Française. *Le dictionnaire de l'Académie Française*. Paris, J.B.Coignard, 1694. 4冊
 Aikin, John. *A description of the country from thirty to forty miles round Manchester*. London, J. Stockdale, 1775.

- Barthélemy, Auguste Marseille. *Napoléon en Égypte*. Paris, A. Dupont, 1829.
- Corpus Juris Civilis*. Venetis, Iuntas, 1598-1621. 6冊
- Boswell, James. *The life of Samuel Johnson*. London, H. Baldwin, 1971. 2冊 No90
- Burke, Edmund. *Two letters addressed to a member of the present parliament on the proposals for peace* London, F. and C. Rivington, 1796.
- Davenant, Charles. *An essay upon the probable methods of making a people Gainers in the ballance of trade*. London Fames Knapton, 1699.
- Galilei, Galileo. *Opere*. Firenze, Nella Stamp di S. A. R. Gio, 1718. 3冊 No74
- Haebler, Konrad. *German incunabula*. München, Weiss, 1927.
- Haebler, Konrad. *Italian incunabula*. München, Weiss, 1927.
- Harris, John. *Lexicon technicum*. London, J. Walthoe [and others] 1736. 2冊
- Herbart, Johann Friedrich. *Umriss pädagogischer Vorlesungen*. Göttingen, Dieterich, 1835.
- Herbart, Johann Friedrich. *Allgemeine Pädagogik aus dem Zweck der Erziehung abgeleitet*. Göttingen, J. F. Röwer, 1806.
- Higden, Ranulph. *Polychronicon*. Westminster, William Caxton at Westminster, 1482.
- Hume, David. *Four dissertations*. London, A. Millar, 1757. No81
- Hutcheson, Francis. *An inquiry into the original of our ideas of beauty and virtuc*. London, J. and J. Knapton, 1729.
- Jevons, William Stanley. *The elements of logic*. New York, Sheldon [c1883]
- Johnson, John. *A collection of all the ecolesiastical laws, canons, answers, or rescripts*,...London, R. Knaplock, 1720. 2冊

- Kant, Immanuel. *Über Pädagogik*. Königsberg, F. Nicolovius, 1803.
- Keats, John. *The poems of John Keats*. Hammersmith, [William Morris at the Kelmscott Press, 1894] No83
- Locke, John. *A collection of several pieces of Mr. John Locke*. London, J. Bettenham, 1970. No88
- Locke, John. *The conduct of the understanding*. London, T. Davison, 1825.
- Locke, John. *The reasonableness of Christianity*. 2d ed. London, Awnsham & J. Churchil, 1696. No80
- Locke, John. *Some thoughts concerning education*. 6th ed. enl. London, Printed for A. & F. Churchill, 1709. No69
- Locke, John. *Two treatises of government*. London, printed by Awnsham and J. Churchill, 1698. No65
- Luckombe, P. *The history and art of printing*. London, W. Adlard and J. Browne, 1771.
- Martin, Samuel. *A dissertation on the nature*. London, T. Cadell, 1766.
- Pestalozzi, Johann Heinrich. *Wie Gertrud ihre Kinder lehrt*. Bern, H. Gessner, 1801. No63
- Ray, John. *A collection of English words*. London, H. Bruges, 1674.
- Richelieu, Armand Jean du Plessis. *Testament politique*. Amsterdam, H. Desbordes, 1696.
- Rousseau, Jean Jacques. *Emile*. Paris, Defer de Maisonneuve, 1791. 2冊 No79
- Rousseau, Jean Jacques. *Oeuvres de J. J. Rousseau*. Paris, Garnery, 1823. 第14巻のみ1冊
- Salzmann, Christian Gotthilf. *Krebsbüchlein*. Erfurt, G. A. Keyser, 1829.
- Savary, Jaques. *Oevres*. Paris, Chez les Etienne, 1763. 2冊
- Shaftesbury, Anthony Ashley Cooper. *Characteristics of men, manners, opinions, times*. London, [John Darby] 1732-37. 3冊
- Smellie, William. *The philosophy of natural history*. Edinburgh, C. Elliot, 1790.
- Smith, Adam. *An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations*. London, W. Strahan, 1776. 2冊 No73

Smith, Adam. *Letter, 1786 Mar.*, Edinburgh, to [Thomas Cadell]

Universal dictionary of trade and commerce. London, John Knapton, 1757. 2冊

Webster, Noah. *An American dictionary of the English language.* New York, S. Converse, 1828. 2冊 No.42

Webster, Noah. *Rudiments of English grammar.* New York, Isaac Riley, 1811.

Zincke, George Heinrich. *Allgemeines Oeconomisches Lexicon.* Leipzig, J. F. Gleditschens, 1764. 2冊

* 号数は、『図書館ニュース』または『コスモス』に当該貴重書の解題のあるナンバーを示す。

以上であるが、この他に準貴重書（貴重書に準ずる取扱いをするもの）は未指定をも含め数万冊に達する。和書のうちに特に、絵巻物、奈良絵本の多くは、保存が悪く絵の剝離、表紙や紐の切れ、保管用の桐箱のこわれなどが甚だしかった。そのため昭和五五年度から予算を要求し順次修理を行った。業者は、東京国立博物館出入りの表具師得水軒である（『コスモス』五四号、一九八一年七月二〇日）。

六 文献複写と参考業務

文献複写は、図書館間において資料の相互利用を図るための必須の業務であり、また形態上保存に耐えない文献をマイクロフィルム化して保管し、入手がたい文献を複写して利用者に提供することにより、研究に資する効果を持っている。

初めて複写用の装置を設備したのは昭和三〇年であり、文部省の基礎設備助成金の援助を得て、マイクロフィルム撮影機と同リーダー（閲読機）を購入、複写業務を開始した。その後は、技術の進歩とともに各種の複写機を導入し、

活発な文献複写が行われている。

参考業務とは、閲覧目録や参考図書だけでなく、図書館員が直接手を差し伸べて利用者と資料を結びつけるための業務をいうが、本館に必要な文献が所蔵されていない場合の他館への紹介、文献複写の依頼・受付をも含めている場合が多い。

本学では、昭和二十四年の図書館改革の一環として、旧図書館二階カウンター向って右側の部屋に参考図書が配架され、参考業務が行われた。しかし、閲覧業務の片手間の作業で、専任担当者を置くには至らなかったが、四一年四月からは一室を確保し、専任者一名を置いて本格的に始動した。昭和六二年現在、参考図書四万二千二三冊、文献所在調査六三一件（教員八四、職員七八、学生三四九、学外者二〇）、文献調査二四〇件（教員二九、職員二七、学生一七九、学外者五）、事実調査一一三件（教員一五、職員四〇、学生五一、学外者七）、書誌的事項一三四件（教員二〇、職員三六、学生六六、学外者一二）、利用指導二二七件（教員一二、職員六、学生一九五、学外者一四）、その他二件合計一三四七件、相互協力は文献複写七七五件（受付五二八、依頼二四七）、閲覧四一二件（受付一一一、依頼三〇二）に上っている。文献複写については受付が依頼を大きく上回っている。

参考業務は今後いよいよ多くなり、図書館員に頭腦的作業を要求するものとなるう。

七 学生の図書館外貸出方法の改正

学生に対する図書の館外貸出は、昭和二十四年図書館の近代化に着手するに際し、ブックカードなどを図書に装備することによって、すでにその準備がなされていた。このことを実現すべく、何度か「図書館運営委員会」に諮られた

が、教員の利用を阻むとの懸念から、時期尚早という理由で反対されてきた。この突破口は、昭和三四年一〇月二七日の委員会によって開かれたが、その条件は、

一部の学生 休日正午より、休日の翌日午前一〇時まで

二部の学生 休日の前日午後七時より、休日の翌日午後七時まで

同時に二冊 クラス担当かゼミ担当教員の保証を必要とする

というきわめて厳重な制限の下でしかなかった。

右が『東洋大学八十年史』（昭和四二年二月三日刊）の記すところである。しかし、これは何かの勘違いか、誤解であろう。なぜならば、このことが仮に真実であれば、図書館員のうち、何人かは休日正午には必ず出勤していなければならぬからである。しかし、今日となつては確認する方法を持たない。

このような制限を緩和する努力はその後も続けられ、昭和三七年六月八日の「図書館運営委員会」では、

貸出日 木曜日——返却日 翌水曜日

の一週間貸出が認められ、三八年七月より開館日毎日貸出、一週間後の貸出曜日返却となり、四一年四月より教員の保証も撤廃された。これは「東洋大学附属図書館学生に対する貸出細則」（昭和四一年七月一日制定）により明文化された。さらに、五二年四月一日より、三冊一週間（『コスモス』三六号、五二年四月二六日）、五九年四月一日より、三冊二週間、雑誌別枠二冊一週間（『コスモス』六五号、五九年四月一日）となり今日に至っている。

八 私立大学図書館協会と本学図書館

私立大学図書館協会は、私立大学連盟などのような法人が加盟の単位となる団体ではなく、それぞれの私立大学の図書館が加盟する団体である。

代表校は常任理事校であり、事務所をその代表校の図書館に置き、加盟校は東地区(静岡・長野・石川の各県およびそれ以东)、西地区(愛知・岐阜・福井の各県およびそれ以西)に分けられ、地区部会を構成することになっている。

協会の目的は大学図書館の改善・発達に資することであり、大学図書館に関する調査・研究および成果の刊行、研究会・講演会の開催、対外関係活動などの諸事業を行っている。総会・大会は毎年常任理事校が招集し、三年に一回は関西、二回は関東で開催することになっている。総会では、事業計画、予算・決算、会則および細則の制定、改廃、役員校の選任、役員校の会務処理報告などを行い、大会では大学図書館の運営・業務改善、加盟図書館員の資質の向上その他協会の対外関係活動などを審議する。各大学図書館が輪番で当番校を引き受けることになっている。大会に引き続いて研究会を開催し、加盟館員の自由な専門的調査・研究成果発表、専門家による講演が行われる。また、年二回機関誌『私立大学図書館協会会報』を刊行している(『図書館ニュース』七号、四二年一月一〇日)。

本学図書館が協会活動に直接参画したのは、大きく分けて二度にわたっている。一度は大会の当番校を務めたことであり、二度目は協会の代表校である常任理事校を引き受けたことである。

一 第三四回(昭和四八年度)大会・研究会開催日昭和四八年七月二十六日―二十八日。当時の館長は大島建彦教授。総会議事その他、各大学関係者による研究発表。講演「情報化時代における生活と社会」(本学磯村英一学長(当時))。懇親会

は「椿山荘」。見学研修は「国立公文書館」、「国立近代美術館」、「東京都立中央図書館」であった（参加者一二六大学、二七八名）。

『コスモス』二三号、一九七三年一〇月三〇日、『私立大学図書館協会会報』六二、昭和四八年一月五日

二 常任理事校兼東地区部会担当理事校。昭和五十四年度（館長は飯島宗享教授）、翌五十五年（館長は野村順一教授）の二ケ年間。ちなみに両年の大会は、

第四〇回（昭和五十四年度）大会・研究会 当番校麗沢大学図書館。開催日昭和五十四年七月二六日―二八日。総会議事
 の他、各大学関係者による研究発表、講演「中国事情」（麗沢大学奥平定世教授）、「イギリスの大学生活」（麗沢大学
 G・バントック助教授）であった（参加者一五四大学、三六四名）。（私立大学図書館協会会報』七四、昭和五四年一
 二月一〇日）

第四一回（昭和五十五年）大会・研究会 当番校中央大学図書館。開催日昭和五十五年七月二四日―二六日。総会議事
 の他、各大学関係者の研究発表、講演「新エネルギーと環境問題」（中央大学安藤淳平教授）、「文豪と読書」（中央大
 学高橋健二名誉教授）であった（参加者一八一大学、三四七名）。（私立大学図書館協会会報』七六、昭和五六年一月
 二〇日）

なお、年度末に常任理事校は立命館大学図書館に、東地区部会担当理事校は玉川大学図書館に引き継いだ。

九 記念事業への参加

1 創立九〇周年

昭和五二（一九七七）年、本学は九〇周年を迎えた。大学は「東洋大学創立九〇周年記念事業委員会」を組織し、その目的達成のため、

一 記念館の建設

二 東洋大学井上円了記念基金事業

三 卒業生名簿の作成

四 東洋大学一〇〇周年記念事業の準備

を挙げているが（『東洋大学広報』一四五号、昭和五一年三月一日）、具体的な記念事業は行われなかった。ただ、図書館主催の記念講演会が十一月二十六日に開催された（会場第三閲覧室）。演題と講演者は、

一 「井上円了の妖怪学」 河村孝照氏（本学）

二 「井上円了の宗教哲学思想」 峰島旭雄氏（早稲田大学教授）

である。講演終了後、館内別室で井上円了遺族、真溪理事長、講演者を囲み座談会が持たれた（『コスモス』三九号、一九七八年二月二〇日）。

2 創立一〇〇周年記念事業への参加

館蔵貴重書を中心に、丸善（日本橋店四階ギャラリー）において、「創立一〇〇周年記念日本文学資料展」（昭和六二年九月二一日（月）—二六日（出））を開催した。展示内容は（一）絵巻と奈良絵本（二六点）（二）百人一首と異種百人一首（八〇点）（三）膝栗毛と明治の膝栗毛（三〇点）（四）井上円了関係である。入場者は約三九〇〇人に達した。極彩色を主とした図録（六五頁、『東洋大学創立一〇〇周年記念日本文学資料展図録』については主要出版物の項参照）を発行し頒布した。同時に、朝霞（同二〇月二二日—二七日）、川越（同月二四日—二七日）、白山（同月三〇日—一月二日）の三キャンパスで「東洋大学創立一〇〇周年記念展」を開いた（入場者約一九〇〇人、『コスモス』七九号、一九八七年一月三〇日）。

一〇 指定図書制度と教員指定参考書制度の実施

図書館における図書の利用法については、繰り返し新しい試みが模索されてきたが、本学における顕著な実例としては、指定図書制度と教員指定参考書制度がある。

指定図書制度とは、教員が講義などに直接関連のある必読すべき図書を学生と図書館に指定し、試験に際してはその内容が問題のなかにも含まれ、図書館側もこれに応じて指定図書の重複購入を図るとともに、利用については、他の図書とはその取り扱いを別にし、それらの諸方策を通じて「教育と図書館」との一体的関係を樹立しようとする制度である。

新制大学において、一時間の講義に二時間の、また一時間の演習には一時間の学習を必要とする制度そのものも、

指定図書制度を前提としている（『図書館ニュース』一二号、四四年九月二〇日）。

本学においては、はじめ昭和二四年の図書館近代化の一環としてこの制度が試行されたが、一、二年で中絶した。その後同三九年再発足、完全実施のため、全専任教員に指定を依頼し、従来の蔵書から別置し、閲覧業務の一環として実施した。しかし、教室での講義・演習を中心とする日本の大学教育に必ずしもなじまず、四六年度新館建設・移転などの事情で中止し、四七年度にまた復活するなど試行錯誤を繰り返した（『コスモス』一七号、昭和四七年六月二〇日）。これに代るものとして、昭和五五年度に登場したのが教員指定参考書制度である。

この制度は、従来の指定図書の枠を拡大し、授業に関連して参照・利用される図書を「参考書」として教員に指定してもらい、これを図書館が用意し、学生に提供することを目的とするもので、指定書との違いは、(一)これまでは指定する教員が専任に限られたが、非常勤をも含めること、(二)サブテキストないし必読書の性格を持っていた指定図書から、緩やかな意味での参考書にまで枠を広げること、(三)指定図書のように別置したり、複本の措置をとらないようにすること、ただし授業の必要上教員から申し出のあった図書は重複購入したり、別置する（飯島宗享館長名、各教員宛文書、昭和五五年一月一二日。『コスモス』四九号、五五年四月三〇日）、この方式で今日に至っている。

一一 個性形成に係る収書

昭和五四年一月、飯島宗享館長によって本学図書館の個性形成が提唱された。その基本理念は「大学自体が明確な個性と特色を求められる時期にきているのと同様に、図書館もまたそれぞれの特色ある蔵書によって相互利用に寄与することを迫られる時流にある」との考えからきている（『コスモス』四四号、一九七九年一月一五日）。相互協力をする

ためには、協力するに値する個性ある資料を持つことが必要であるとの意味である。その実現のために、

一 民衆に高等教育を普及しようとした創立者井上円了博士の理念に基づき、民衆の知的要求に応答し、開かれた大学の創出に努力すること

二 法律、経済などの実学が尊重された時代に、敢て哲学を基盤とする哲学館が創設された意味を問うこと

三 国際交流を促進する基本理念を確立すること

四 民衆の生活行動を対象とする学際的研究方法を開拓すること

五 大学の長期目標を確立し、目標実現のため、中・短期の目的を設定しうる機動的教學体制を作りあげること

以上の五点を考慮して、その特質を生かす収書主題を「民衆の生活基盤としての東洋学」とし、第一着手として、哲学堂図書館蔵書を関連づけた「民衆水準における一九世紀末の日本思想の形成」という主題に沿った収書計画を策定するという方針が提案された（飯島宗享「東洋大学白山図書館における蔵書の個性形成について」昭和六〇年一月一八日）。すなわち、本学の伝統に照らして、収書を行い、これを個性として他大学図書館との協力体制を確立しようとするものである。

そこで個性形成の当面のテーマは「井上円了と明治思想」と限定し、その収集基準ならびに重点順位を次のとおり定めた。

一 井上円了著作関係

(一) 著書、論文、講義録

(二) 雑誌寄稿文、談話

(三) 挨拶文、その他揮毫文、書翰

二 井上円了関係著作

- (一) 円了に関する言及記述
- (二) 円了の思想と生活に直接関わる諸家に関するもの
- (三) 円了の同時代思想家
- (四) 円了と同時代の社会状況に関するもの

(五) 円了の受けた思想に関するもの (円了期の東洋大学・哲学館に関する人と事柄に関わるもの)

三 明治期を主とする日本近代化関係

- (一) 近代日本哲学史・思想史・仏教史 (真宗史)、教育史 (学制・思想・教科書)、宗教史
- (二) 文学史、漢学史、社会史 (階層・身分)、社会思想史
- (三) 法制史、政治史、経済史 (産業史)、外交史、技術史
- (四) 風物史 (風俗史)、歌謡史、服飾史 (文章記述の変化)
- (五) 交通史、通信史、建築史

〔個性形成蒐集基準について〕昭和六〇年七月二一日

大学はこの計画を承認し、その後収書は継続され、資料は蓄積されつつある。

飯島館長時代には、収書に関してこの他に図書館員全員が参加して収書する「収書委員会」を昭和五五年一月二三日に発足させている。

一二 主要出版物

図書目録

『哲學堂圖書館圖書目録』哲學堂 大正五年七月二〇日刊（この目録は、哲學堂の刊行物であり、大学図書館のものではないが、現在この図書は本館の有に帰しているので参考のためここに掲げる）

『哲學堂圖書館圖書目録』復刻版 昭和六〇年六月六日刊（前書のオフセット復刻版。英文Preface（井上円了による緒言のモーゼス・バーグ教授訳）と復刻版の奥付を付す）

『東洋大学図書館蔵書目録』第一卷 昭和四九年三月三一日刊

『同』第二卷 昭和四九年六月三〇日刊

『同』第三卷 昭和四九年一二月二〇日刊

（以上和漢書編）

『同』第四卷 昭和五一年六月三〇日刊

『同』第五卷 昭和五一年一一月三〇日刊

（以上洋書編）

『同』第六卷 昭和五三年一二月一日刊

『同』第七卷 昭和五三年一二月一日刊

（以上索引編（上）・（下））

文庫目録

『中島徳蔵先生寄贈図書目録』 昭和四五年三月三一日刊 故中島徳蔵元学長旧蔵

『宇野脩平旧蔵書目録』 昭和五七年一月二五日程 本学卒業生故宇野脩平東京女子大学教授旧蔵

『龍山文庫目録』（龍山義亮先生遺愛目録） 昭和六〇年一月二五日程 故龍山義亮名誉教授旧蔵

『湯本文庫目録』（湯本武比古旧蔵書目録） 昭和六二年一月三〇日程 故湯本武比古京北中学校長、本学学長事務取扱
旧蔵

雑誌目録

『東洋大学雑誌所蔵目録』 一九八一年版（一九八〇年二月末現在） 昭和五六年三月三一日刊

一〇〇周年記念図録

『東洋大学創立一〇〇周年記念日本文学資料展図録』 昭和六二年九月一六日程

その他

『図書館ニュース』昭和四一年六月一日創刊。その後 KOSMOS（コスモス）と改題今日に至る（創刊は、園田義道館長の時代であったが、当時の館長の言葉に「痛切に感じていることの一つに、図書館の利用者と館自体との間にインター・コミュニケーションが円滑に行われているかどうかということである。どうも共に語り合う共通の広場が欠けているようである」と

あり、相互理解の媒体として発刊したものであった。現在頻度クォーター（季刊）毎号平均約八頁。いまだしの感がないではない。

この他に、外部で評価されたものに、昭和四七年度から各年度ごと刊行の『図書館利用のしおり』がある。五二年一月二六、七日の両日に開催された専門図書館協議会主催の図書館作成資料ならびに図書館用品展示会（会場 東京商工会議所・商工図書館）において、分かりやすいことと創造性に富むとの受賞理由で優秀作品に選ばれ、後藤辰男館長にレリーフと副賞が授与された（『東洋大学広報』一四五号、昭和五二年三月二日、『コスモス』三六号、一九七七年四月二六日）。この「しおり」は俗称東洋大学方式として、その後各図書館において採用されているが、本館においてはすでに使用を中止している。

一三 人事と館長

本学図書館が、創設以来大正期までどのような責任者を中心に運営されてきたかは不明である。

藤原猶雪元学長の『履歴書』二種（自筆 昭和一八年六月。タイプ印刷 昭和三〇年六月。大学院事務課蔵）によれば、元学長は、専門は真宗学・仏教史などであるが、大正三年大谷大学卒業以来、大谷大学図書館幹事、東大文学部における和田万吉からの三年間の図書館学受講後、東大図書館司書、同大学史料編纂官補などを歴任した人物である。また同履歴書と『東洋大学一覧』（大正一三年より、昭和六年まで）などの記録を併せ考えると、大正一三年五月一日から、昭和六年九月一日までの八年有余の年月にわたって館長事務取扱（館長との文書もある）の職にあった。それ以降の大部分の館長名は知られている。館長名と在任期間を表わすと次のとおりである。

第一章 図書館

館長名	担当または所属	在任期間	
藤原 猶雪	史学・仏教	大正一三年五月一日—昭和六年九月一日	事務取扱か
石川 義昌	経 済	昭和六年九月一日— 九年一二月	
広井辰太郎	英 語	〃 一二年 — 一五年	
野村 八良	文	〃 一六年 — (不明)	
藤原 猶雪	文	〃 二二年六月二六日— 二三年一月三一日	
田部 重治	文	〃 二三年二月一日— (不明)	
米林 富男	文	〃 二七年六月 五日— 二九年三月三一日	
松浦 貞俊	文	〃 二九年四月 一日— 三〇年九月二〇日	
一ノ瀬長治	法	〃 三〇年九月二〇日— 三一年三月三一日	事務取扱
毛塚栄五郎	文	〃 三一年四月 一日— 三三年三月三一日	
鳥山 喜一	文	〃 三三年四月 一日— 三四年二月一九日	没後空席か
竹村豊太郎	経	〃 三五年四月 一日— 三六年二月二二日	
市村其三郎	文	〃 三六年二月二三日— 三八年三月一五日	
園田 義道	文	〃 三八年三月二三日— 四三年七月二四日	
中条 博	法	〃 四三年七月二六日— 四五年八月三一日	
岡田 温	社	〃 四五年九月 一日— 四七年八月三一日	

大島 建彦	文	昭和四十七年九月一日	五〇年六月九日	四十九年九月一日—五〇年六月九日
後藤 辰男	文(教養)	〃 五〇年六月一〇日	五二年六月九日	事務取扱
磯村 英一		〃 五二年六月一〇日	五三年三月三十一日	事務取扱
飯島 宗享	文	〃 五三年四月一日	五五年三月三十一日	
野村 順一	経 営	〃 五五年四月一日	五七年三月三十一日	
大川 信明	社	〃 五七年四月一日	六一年三月三十一日	
劍持 通夫	経	〃 六一年四月一日	六三年三月三十一日	

「図書館の職員についても、不明な個所が多いが、戦前は『東洋大学一覽』、戦後は『役員・教職員名簿』（昭和五年度まで）、『役員・教職員住所録』などによって辿ってみると次のとおりである。

年度	職員数
大正13	1
14	3
昭和 2	3
3	4
6	5
9	2
10	1
15	2
16	3
17	2
28	6
32	10
37	12
38	18
39	21
40	21
41	23
42	25
43	23
45	25
46	28
47	35
48	38
49	39
50	38
51	39
52	38
53	38
54	39
55	39
56	37
57	37
58	38
59	33
60	34
61	32
62	32

戦前は、当事者が物故しているため確実なことは言えないが、職員数と館長との関係を推測の手掛かりとすると、藤原館長事務取扱の時代が注目を引く。就任時の一名が退任時には五名に達している。ところが、石川義昌館長の時代には減少を始め、退任の翌年、すなわち昭和一〇年には以前の一名に戻っているのである。これが藤原事務取扱の

経歴、図書館への造詣と無関係であるとは考えにくい。「図書館の経営・分類の設定（タイプ印刷履歴書）」を主張していることから見てもそれは明らかであろう。

特に、昭和三八年三月に就任した園田義道館長はその職務に精励した。『図書館ニュース』（後の『コスモス』）の創刊を始めとして、諸規程の整備・司書職の制度課・二課制への移行、職員の一〇名台の完全確保などがあげられる。さらに、「図書館建設準備委員会」の委員長として、四六年竣工の八〇周年記念図書館建設の準備をなし遂げ、四七年に職員数三八名という空前の盛況を呈する基礎を作り上げたのである。

井上円了を始めとして、その責任の衝にある人びとの熱意が図書館を建設し、発展させるのに与って力があつたが、藤原館長（事務取扱）、園田館長の他には、和田吉人名誉教授（図書館学）が多年にわたって残した足跡も多大である。また、園田館長のあと、顕著な足跡を残した館長に飯島宗享教授がいる。この両者は、図書館内・外の意見に充分に耳を傾け、驚くほどの平衡感覚で次々と事に当たり、必要な提案を行い、問題を解決していった。その時代は、その時代なりに一定の問題を抱えていたことは当然である。その中で最高と考えられる選択をし、退任後も図書館を見守り、いづれもその外護者となつたのである。

第二章 工学部分館

一 設置の背景

昭和三二（一九五七）年十一月、大嶋豊が理事長に就任、理事会は従来文科系の学部のみであった東洋大学に工学部を増設することを決定した。翌三三年一二月、川越市に大学用地を取得、三五年六月に木造校舎A・B・C棟が落成、三六年一月に至って工学部の設置が認可されることになるが、これに先だって、三四年頃から、白山大講堂一階向つて右側の部屋（俗称リハーサル室）を、工学部用図書収納室として準備作業を開始した。集められたのは主として洋書であった。校舎落成後、A館二教室を図書室として使用することになり、白山から図書を移送し、設置審査に備えることとした。一同、「山王」という屋号の酒屋に泊り込みで作業を行ったのである。

二 運営の変遷

1 発足当時

分館は昭和三六（一九六二）年五月に「東洋大学附属図書館工学部分室」という名称で発足した。当時は、教学課職員二名が図書館の職務を担当した。与えられた二教室のうち一教室を書庫、他の一教室を閲覧室と事務室に分割して使用した。蔵書は約一五〇〇冊と僅少ではあったが、図書予算の八〇〇万円は、工学部発足当初のことで当然とはいえ、その後の物価上昇を考慮すればかなりの高額である。ただし、図書の整理（分類・目録作成・装備）は白山本館が担当し、作業終了後工学部分室に運送する方式をとっていた。したがって、整理方法は白山と全く同じであった。

- (一) 分類法は、和書・洋書とも、標準分類法として編纂された日本図書館協会の森清編『日本十進分類法』（六版）を採用した。その後、科学技術系大学図書館に属するので四門（自然科学、五門（工学）は七版を使用している。
 - (二) 目録法も分類法と同じく、和書・洋書ともに、米国図書館協会の『著者・書名記入の目録規則』（American Library Association: A.L.A. cataloging rules for author and title entries. 2d ed. 1949）と、同じく『米国議会図書館の記述目録規則』（U.S. Library of Congress: Rules for descriptive cataloging in the Library of Congress, 1949）を若干改変して採用した。また、日本図書館協会の『日本目録規則』（一九五二年版）も参考にした。
 - (三) 件名は『日本件名標目表』を採用したが、技術用語の確定は日進月歩の分野なので、他のツールを使用するな
- ど困難を極めた。

(四) 目録の編成は、和書・洋書とも一本で、辞書体目録と分類目録の双方を編成することにした。これらの依拠する規則は、その後の和・洋の規則の変更により変遷している。スタッフは、三十七年に三名に、三十八年に五名に増員された。

2 A館への移転

工学部A館校舎(鉄筋)は、昭和三十七年一月に完成していたが、同三十九年五月二号館校舎落成をまって、分室は一二月、冬季休暇を利用し、木造校舎からA館へ移転した。四教室とスペースは拡張された。一階二教室は開架閲覧室、二階二教室のうち、一教室は自由閲覧室、他の一教室は分割して、参考・雑誌室および事務室として使用した。蔵書数も和書約八三〇〇冊、洋書約五六〇〇冊となった。いづれにしても、仮住まいに変わりはなく、収容能力もわずか二年で満杯の状況が見込まれた。

三 附属図書館工学部分館への昇格

昭和四一年二月一日、依然A館同居のままであったが、「東洋大学附属図書館工学部分室」が「分館」に昇格し、これを機に初代分館長に平野耿助教授(当時)が就任した(『図書館ニュース』創刊号、昭和四一年六月一日)。

五年有余にわたる平野分館長の時代は、「工学部分館」に新紀元を開いた。全面的ではないにしろ、整理技術作業にも手を染めたことは特筆すべきであろう。次にその主要な点について述べることにする。

1 蔵書の激増

四一年度は、和書五二三〇冊、洋書二二九一冊、計七五二一冊、四二年度は、和書三二六四冊、洋書三六三四冊、計六九〇〇冊の増加であり、二年間で一万四四二一冊伸びている（累年増加冊数参照）。その後は年間四〇〇〇冊程度の増加であり、この大幅増は、大学院工学研究科修士課程・博士課程申請のためであるが（『図書館ニュース』四号、昭和四二年五月一〇日）、同時に教養関係図書購入のせいであつた。四一年度は、特別予算が計上され、人文科学系、社会科学系併せて一九〇〇冊を購入している。この中には、古今東西の思想家や宗教家の著作、教職・美術関係の図書、岩波文庫全巻などが含まれている（『図書館ニュース』三号、四九年一月一〇日）。

元来工学部図書館の蔵書は、最新の科学技術文献、特に第一次資料である逐次刊行物に重点が置かれるのが普通である。しかし、科学技術にのみ眼を奪われて、それを背景から支える広い教養を無視することはできないであろう。ここに初めて、バランスのとれた蔵書を持つ工科系大学図書館が生まれたのである。

2 分館規程の制定

白山本館において、園田義道館長のもとに「東洋大学附属図書館規則」の改正の動きがあり、昭和四一年五月一日に施行された。その第三条「図書館に分館を置くことができる」、同条第二項「分館に関する規程は別に定める」によって定められたものが、「東洋大学附属図書館工学部分館規程」（昭和四一年七月一三日制定である。この規程の制定に伴い白山本館に準じた「分館運営委員会」の発足を見るのである）。

3 工學部分館の建設

平野分館長は、この仮住まい状況を一日も早く脱却するよう全力を傾注した。分館長は、図書館に対する一種の哲学を持っていた。「図書館は」教授陣とならぶ大学の頭脳である以上、図書館がキャンパスで最も豪華な施設であっても少しも不思議ではない。なによりもそこは、教職員や学生が、自然と足をむける魅力的な場所であってほしい」というものである（『図書館ニュース』六号、昭和四二年一〇月一〇日）。

「分館運営委員会」において分館建設のことを議したのは、委員会草創のことと考えられる（『図書館工學部分館建設計画の経過と見通しについて』（案）大越諄工學部長、文責平野耿、昭和四四年）。

地鎮祭は昭和四四年一〇月一三日（『東洋大学広報』三一号、昭和四四年一月一日）。

設計監理 平山建築研究所（平山嵩教授）

施行 鹿島建設株式会社

着工 昭和四四年一月（『東洋大学報』二号、昭和四四年一月二〇日）

竣工 同四五年六月、同月三〇日引渡し

工事費 建物及び附帯工事費 六七〇〇万円

什器・備品費 八六〇万円

構造 鉄筋コンクリート造二階建

総面積 一四四一・六七平方米（二階七八九・四四平方米、二階六五二・二三平方米）

設備内容 一階 書庫（三万一〇〇〇冊収容、キャレル六席）、複写室、暗室、応接室兼分館長室、館内放送設備、事務室

二階 目録室、大閲覧室（開架一万八〇〇〇冊）、参考コーナー、雑誌コーナー（合計一八六席）、教員閲覧室（一二席）、ロッカーーム（私物収容用）、休憩コーナー

その他空調設備は書庫のみ（昭和五一年八月より大閲覧室も空調設備が入る）

履き物との衝撃音を弱め静粛を保つため、閲覧室の床には絨毯を敷いた。これは、後に完成する白山図書館も同様であるが、わが国の図書館では最初の試みである。書庫の乾燥をまつて、八月中に移転を行い（『東洋大学広報』四三号、昭和四五年七月一日）、九月に開館の運びとなった。

新館開館を契機に整理作業は分館で行うようになり、名実ともに独立館へと成長したのである（『コスモス』六巻一号、一九七一年六月一五日）。

新館完成の六カ月後、工学部は急遽電算機を導入することになったが、設置場所に困窮し、図書館書庫増築予定部分（ピロティ）を占拠することとなった。この状態は、五一年五月五日、六号館が完成するまで続くが、ようやく電算機室は移転し、図書館書庫として使用可能となった。約一八〇平方米。書架（一部電動式）を設置し、四万三〇〇〇冊収容可能となった（『コスモス』三五号、一九七七年一月二五日）。

もつとも、書庫問題はこれ以後も続き、現在もほとんど満杯状態になっている（累年増加冊数参照）。

昭和四五年竣工の現在の建物は、一七年を経過した六二年、配架場所・閲覧スペースなど施設面で狭隘さが顕著になってきている。幸いに周囲には増築の余地が残されており、また、一五〇〇平方メートルの増築計画が確認されている。しかし、学部内の優先順位の関係もあってただちに着工の運びには至っていない。

四 工学部分館出版物と累年増加冊数

『東洋大学工学部雑誌目録一九八七』東洋大学図書館工学部分館刊、昭和六二年一月二三日。
 この目録は、東洋大学創立一〇〇周年記念出版物の一種であり、工学部分館が所蔵する和・洋雑誌のバックナンバ
 ーをも含めた本格物雑誌目録である（「コスモス」八〇号、一九八八年一月二五日）。

工学部分館累年増加冊数

年度	和漢書	洋書	計(総冊数)
昭和35年	1,739	2,899	4,638
36年	6,115	3,360	9,475
37年	7,713	4,415	12,128
38年	8,342	5,683	14,025
39年	9,939	7,413	17,352
40年	11,886	8,624	20,510
41年	17,116	10,915	28,031
42年	20,382	14,549	34,931
43年	23,646	16,989	40,635
44年	25,443	17,849	43,292
45年	29,237	20,673	49,910
46年	32,343	22,868	55,211
47年	35,198	24,636	59,834
48年	37,027	26,205	63,232
49年	38,980	27,490	66,470
50年	41,289	28,832	70,121
51年	43,189	30,010	73,199
52年	45,374	31,152	76,526
53年	47,802	32,832	80,634
54年	49,825	34,324	84,149
55年	51,856	35,853	87,709
56年	53,939	37,454	91,393
57年	56,103	38,783	94,886
58年	57,994	39,815	97,809
59年	60,673	40,458	101,131
60年	63,992	40,881	104,873
61年	66,835	42,518	109,353
62年	70,599	43,332	113,931

五 人事と分館長

工学部分館の歴代分館長名と職員数の推移は次のとおりである。ただ人員については正職員の他アルバイト数名がいるが員数には含まれていない。

分館長名	所属	在任期間		備考
平野 耿	教養	昭和四一年二月一日～	四六年四月三〇日	
一瀬 正	機械	〃 四六年五月一日～	四八年三月三十一日	
都 淳一	土木	〃 四八年四月一日～	四九年二月一日	没後空席
山下 忠孝	応化	〃 五〇年四月一日～	五四年三月三十一日	
及川 浩	教養	〃 五四年四月一日～	五六年三月三十一日	
田中平次郎	電気	〃 五六年四月一日～	五七年一月三〇日	
齊 加実彦	電気	〃 五七年二月一日～	六〇年三月三十一日	
上原 邦雄	機械	〃 六〇年四月一日～	六二年三月三十一日	
笠原 英志	機械	〃 六二年四月一日～平成元年三月三十一日		

第一編 附属図書館

年度	職員数
昭和40	2
41	5
42	5
43	5
44	5
45	6
46	6
47	7
48	7
49	7
50	7
51	7
52	7
53	6
54	7
55	7
56	7
57	7
58	7
59	7
60	7
61	8
62	9

第三章 朝霞分館

一 設置の背景

学部を増設、入学定員の増大などの事情により、白山校舎は超過密状態となり、学生の一部を朝霞校舎において教育する必要が生じた。法人として朝霞校地に校舎を建築し、授業の一部を移行することを最終決定したのは、昭和五年三月の時点と推測される（『東洋大学広報』一四八号、昭和五年五月二十五日）。「学内通知」は、同年四月一日より、白山五学部のうち経済・経営・法・社会の各学部の一年次生の授業全部と文学部の授業の一部を朝霞校舎で行っていると報じ、その建物の中に教室のほかに「図書室」が設けられていることを明記している。同時に、同日付で「東洋大学附属図書館朝霞分館規程」を施行している。

これより先、同誌一四六号（同年四月一日）人事欄に同年三月二十八日付で、図書館整理課鹿島仁郎係長に図書館朝霞分館の開設準備係長、図書館図書課河田茂に図書館朝霞分館開設準備をそれぞれ命じた旨記載されている。

二 開設

開設時の施設は、当時一棟のみであった校舎（現在の一号館）三階のベランダ付きの部屋であり、閲覧室四〇八平方
米（座席二三席）、事務室二七・六平方米、計四三五・六平方米の狭さであった。書架収容能力二万冊余、雑誌架（四
〇〇点収容可）、私物収納用ロッカー一四〇人分、図書約一万冊、全面開架方式でスタートした。専任職員は、前記二名
のほか新人二名の計四名であった。

当時は、閲覧のみを行い、図書の受け入れ、整理（分類・目録作成・装備）などは、白山図書館で行った（『コスモス』
三六号、一九七七年四月二六日、同誌三七号、同年七月一日）。

名称は「朝霞分館」でも、規模も前述のとおりであり、分館長の選任もなく、『広報』にいみじくも記されているよ
うに「図書室」というのがその実情であった。

四学部一年次生のみ移行ではあったが、座席数一三二に対して、利用者平均二五〇名前後、最高三〇七名に達し、
その施設・設備の狭隘は、隠れもない事実となつて現われた。その結果提出された館長事務取扱磯村英一学長名、真
溪義貫理事長宛「申請書」（昭和五二年一〇月七日付）は縷々としてこの間の事情を述べているが、その大要は次のと
りである。

一 独立館が理想であるが、当面不可能としても、最小限、明年度予定の二年次生の移行について対応を考慮しなければ
ならない（学生数一年次生二九五〇名）。

二 利用者の状態（前述）は当然二倍になることを予想しなければならない。

三 収容能力（二万冊）は一年足らずで満杯となる。

四 事務室も狭く、作業用のスペースもない。

五 『私立大学図書館協会改善要綱』は学生数の一〇パーセントの座席（六〇〇席）が望ましいというが、せめて五〇〇席は確保したい。

六 第二期工事の設計図（現二号館）をみると六一七平方メートルを確保しているに過ぎない。一・二号館に分れれば、管理運営上最悪の事態を招くことになる。

開館一年後の五三年四月には、目録配列の用意が整い、検索用として、白山と同じく辞書体目録が新設された。

同年四月一七日付で、初代分館長に経済学部大田章教授が選任されている（『コスモス』四一号、一九七八年七月一日）。

三二二号館への移転

五四年四月、「東洋大学朝霞自然科学研究演習施設」（現在の二号館）の落成と、経済・経営・法の三学部の二年次生の移行に伴い、分館は二号館三階に移転した（閲覧室九七四・二平方メートル、事務室六七・四平方メートル、計一〇四一・六平方メートル、座席数二五八席、私物収納用ロッカー二七八名分、収容冊数六万冊）。専任職員六名。いずれにしても仮住まいに変りにはなかった（『コスモス』四六号、一九七九年七月五日）。

また、同年六月から、多目的教室を利用して、月三回の頻度で「視聴覚ライブラリー」と銘打った催物を行うようになり、同年十一月からは、視聴覚資料の貸出しを実施することになった。

四 自館整理へ

昭和五九年三月末までは、朝霞分館の図書はすべて、白山本館において、受け入れから分類・目録作業・装備に至るまで一貫して行ってきた。これは、朝霞分館の人的態勢を考慮に入れば仕方のないことではあった。しかし、図書館の本来の機能である「利用者のニーズに対応し迅速かつ円滑に図書資料を提供する」という使命からは、かけ離れた好ましくない体制であった（昭和五九年度朝霞分館運営経過）。

五八年六月一日人事異動により就任した朝霞分館池田勉事務課長は、整理業務を移管すべく検討を始めたが、移管は現在の人員では不可能であり、白山本館整理課四名、図書課総務係一名計五名を人事異動させることを要請した（「朝霞分館設置図書の整理に関する分館への移管措置とそれにもなう人員計画の要請について」大川信明館長宛、松岡八郎分館長名）。これは単に整理業務のみでなく、選書・発注・検収・受け入れ・会計処理・図書整理と一連の業務を全面的に移行するものであり、同時に『日本全国書誌』週刊版を選書のツールとして使用し、「国立国会図書館カード」を導入するということであった。

その際、検索手段と依拠する分類法の変更を行うこととした。

- 一 辞書体目録を分割し、和書と洋書を分け、著者名目録と書名目録を独立させる。件名目録は和洋混配のままとする（『コスモス』六七号、一九八四年一〇月二〇日）。

- 二 『日本十進分類法』六版から八版に変更。これは「国立国会図書館カード」・その他市販カードを使用するとき、発注・分類作業の省力化を図るためである。既に整理済みの図書も八版に変更する。

三 目録法は『日本目録規則』新版予備版を使用することとする。

前記の事項をオーソライズするために「東洋大学附属図書館朝霞分館規程」を五九年四月一日付で改正し、第三条の第二項に「分館の図書は分館の受入原簿に登録し整理するものとする」との一項を加えている。

人員も、五九年三名、六〇年二名計五名の増加を見ている。

五 新図書館の建設

昭和六一年度には、白山五学部一・二年次生の全部を朝霞校舎で教育することが決定されていた。それに対して、二号館三階の図書館はきわめて手狭であり、独立館の建設は早晚行われなければならなかった。

大学は六二年に創立一〇〇周年を迎えるが、その記念館として位置づけた朝霞図書館の建設を決定した。図書館側はこれに対応し、池田勉分館事務課長起案の「朝霞図書館棟建設計画」案を中心に検討を行い、最終計画案を関係主管部および理事長に答申した。その成果が理事会で大幅に採り入れられ「新朝霞図書館建設計画書」として纏められた。朝霞校地周辺には文化的諸機関・設備が少なく、本学に求められる文化面での指導的役割が大きい。朝霞図書館の建設は、学生・教職員の研究・教育・学習の推進のための情報提供にとどまらず、地域住民に対しても文化的・学術的諸情報を提供しようとする役割を果たすと謳われている（『大学図書館研究』二九号、一九八六年二月二五日）。

着	工	昭	和	六	〇	年	五	月
竣	工	同	六	一	年	二	月	
開	館	日	同	年	四	月	九	日（水）

設計監理 久米建築事務所

施行 鹿島建設株式会社

構造 地下一階 地上三階 鉄筋コンクリート造

延床面積 五五二八・八七四平方米

(一階一八四五・六五二平方米、二階一八七四・一五四平方米、三階一八〇九・〇六九平方米)

収容冊数 約五二万冊(開架約一〇万冊、閉架四二万冊)

閲覧席 六八六席

別にキャレル 六席(個室六室)

共同研究室 四〇席(二室各二〇席)

視聴覚ホール 一一〇席

個人視聴室 三〇席

全館空調

閉架書庫はあるが、当面は、利用者が書架から自由に図書を選ぶことができる開架システムを採用。視聴覚室は最新の機器を設備し、ニューメディアの要求に対応できる施設を整えている。

施設、機能面では、一階は第一閲覧室(座席数一七〇席)、第二閲覧室(二六二席)が明るい窓側に沿って配置されている。中央部分には、書架が設置され、『日本十進分類法』(八版)による総記・哲学・歴史・社会科学・自然科学・技術・産業・芸術の各分野の図書と製本雑誌(バックナンバー)および岩波新書・中公新書・クセジュ文庫・岩波文庫・講談社学術文庫・Reclam Pocheなどの図書が配架されている。

二階は図書館の出入口となっており、ブックデイトクション・システム(貸出し手続き確認装置)が設置してある。

利用者は圖書の館外貸出しを受ける場合は手続きを取る必要がある。

図書館の利用手続きのすべては、この二階のカウンターで行われる。図書館の「インフォーマーション・サービスセンター」の機能と役割を集中的に執り行うステーションである。この階には参考図書室があり、座席数一二六席。

参考図書（書誌・索引・辞書・年鑑・地図・統計書など）を配架し、参考調査活動を行う専任の参考係により圖書の検索、利用指導、文献・資料についての質問への回答、他館への紹介などを行う。同じくこの階には、雑誌室、新聞コーナー、目録コーナー、ブラウジングルーム、コピーコーナーが設置してある。雑誌室は八四席、雑誌架には最新号が誌名順（アルファベット）に展示してある。新聞コーナーには日刊紙と縮刷版が揃い、目録コーナーには、著者名目録（和・洋別）、書名目録（和・洋別）、件名目録（和・洋混配）が置かれている。

三階には第三閲覧室（二四四席）、視聴覚室、マイクロ室、貴重書室、キャレル等がある。書架には語学・文学分野の図書、製本雑誌を配架している。視聴覚室にはAVホール、個人視聴室があり、映写会・音楽会などを催すことが可能である。視聴覚資料は、CD・ビデオテープ・レコード・16ミリ・8ミリフィルムなどがあり、これらの資料を視聴することが可能である。分館長室、事務室は二階にある。

地階は一方の面を掘り抜きのガラス張りとして、外側に噴水を設け、当面、自然光を充分取り込んだ快適な学生食堂（二六二席）として利用するが、将来は必要に応じて書庫に変更しうる構造となっている。

こうして、従来の仮住まいから一挙に近代的図書館に生まれ変わったのである（『東洋大学報』七七号、昭和六一年四月二一日）。落成式は、同年三月一三日に内外の関係者三〇〇人を招待し、盛大に挙行された。その際、『東洋大学図書館朝霞分館』（開館披露用パンフレット）ならびに東洋大学図書館（白山）所蔵貴重書『建礼門院右京大夫集』断簡の複製本（神作光一学長解説）を記念品として配布し、本学所蔵の貴重書の展示を行った（『東洋大学広報』二〇〇号、昭和六一

年四月二五日、『朝霞図書館、研究・管理棟落成式記念貴重図書等展示目録・解説』同年三月二三日、『コスモス』七三号、一九八六年三月二五日）。

当初、学生の動線に沿った位置に図書館がないため利用者が限定されるのではないかとの危惧が示されたが、年を追うごとに利用者が増加しているのは好ましい状況である。

六 朝霞分館懇談会の設置

たびたび記すように、朝霞キャンパスは、白山五学部の一・二年次の学生を教育する場である。当然、三年になれば学生は白山校舎に通学することになる。工学部が四年制の完成教育であるのとその性格を異にしている。「朝霞分館規程」に運営委員会の定めがないのはそのためである。しかし、朝霞分館の問題をすべて白山中心の「図書館運営委員会」で処理するのは困難が伴う。朝霞独自の問題も存在するのである。そこで、分館長の諮問に應えるため、六一一年六月一日付で「朝霞分館懇談会」が発足した（「朝霞分館懇談会要領」昭和六一年六月一日）。ただし、この機関は正式なものではなく、運営も必ずしも円滑に行われなかった。そのため、六三年五月二五日に「図書館運営委員会」の下部組織として「朝霞分館小委会」が発足し、今日に至っている。

七 蔵書の特徴

文系一・二年次生の教育を目的とした朝霞校舎の図書館であれば、これに應えるものでなければならぬ。そこで、

朝霞分館累年増加冊数

年度	和 書	洋 書	計(総数)
昭和51年	7,117		7,117
52年	13,524	98	13,622
53年	18,245	396	18,641
54年	27,106	864	27,970
55年	32,720	1,535	34,255
56年	39,640	1,835	41,475
57年	46,195	2,080	48,275
58年	54,700	5,670	60,370
59年	63,282	6,642	69,924
60年	68,538	7,593	76,131
61年	76,580	8,536	85,116
62年	86,125	9,296	95,421

次のような基本方針を掲げて収書に当たっている。

- 一 蔵書構成のバランスを考慮し、基本的学習図書を中心に収集する。
- 二 参考図書については、特に一・二年次に必要なものを重点的に収集する。
- 三 研究用図書は朝霞に研究室を有する教員のニーズを考慮し、必要最小限のものを収集する。
- 四 視聴覚室の利用が予想を大きく上回っている状況を考慮し、視聴覚資料の収集を重視する。

このように、蔵書面にも学生の学習図書館である性格が現われている。

しかし、例外がないわけではない。「千葉文庫」がそれである。これは、名誉教授千葉雄次郎元理事長の寄贈によるものである。和書三七四三冊、洋書一五一三冊、計五二五六冊。内容はマスコミ研究の全領域にわたり、特に新聞記者の体験的ジャーナリズム論、マスコミ企業の社史類、ドイツ語の新聞論やマスコミ法制文献が中心であるが、さまざまな領域の内外の文献が収められている(『コスモス』九一号、一九九〇年一月三〇日)。五八年の初頭、千葉名誉教授より、社会学部広瀬英彦教授を通じて寄贈の申し出があり、麻布のマンシヨンの蔵書と伊豆の別荘の蔵書を、同年六月七・八両日にわたって搬入した(『コスモス』六三三号、一九八三年一月二五日)。ついで、追加寄贈の申し出があり(寄贈日不明)、二度にわたって受贈したものである。これには裏話があり、白山図書館に収容余力がなく、大学側の返辞が遅れたこともあり、千葉名誉教授が場合によっては故大宅壮一氏の文庫に寄贈すると

いう話が持ちあがっていたのである。これを免れたのは僥倖であった。

当文庫に関しては、『千葉文庫目録』（千葉雄次郎先生の旧蔵書目録）が平成元年八月二日に刊行された。

八 人事と分館長

大学創立一〇〇周年までの分館長名と職員数の推移は、次のとおりである。

分館長名		所属	在任期間
犬田 章	経済	昭和五三年四月一七—五五年三月三一	
松岡 八郎	法	〃 五五年四月一日—五九年三月三一	
今井光太郎	経済	〃 五九年四月一日—六一年四月三〇	
三和一博	法	〃 六一年五月一日—六三年三月三一	

年度	職員数
昭和51	4
52	5
53	4
54	6
55	6
56	6
57	6
58	6
59	9
60	11
61	15
62	14

ちなみに、右の職員数のうち、五九年～六〇年は、朝霞分館図書の自館一貫整理開始の年に当たり、六一年は独立

館竣工の年である。

(山内四郎・山崎正巳)

後記

創立一〇〇周年を過ぎて丸五年になろうとしているが、この間に画期的な事態が進行しつつある。すなわち、二期に分けた白山校地の全面再開発に伴う新図書館の建設計画である。第二期工事（平成四年～六年予定）による高層の中央棟の一、二階の一部および地下一、二階のほとんどを占める最新鋭の施設・設備を備えた図書館がそれである。

第二期工事を目前に控えた現在、本学図書館が抱える幾つかの重要課題について、ここで簡単に触れておきたい。それぞれの問題が相互に関連しているものであることはいうまでもない。

1 新図書館

新館については設計図もほとんど完成し、着工を待つばかりの段階であるが、その規模は面積延べ約六〇〇〇平方メートル、座席数約一〇〇〇席、開架図書約一五万冊を含め収蔵図書冊数約一〇〇万冊（目標）の予定である。何よりも内容の充実を図ることが肝心である。

2 図書館情報システム

将来的には白山、川越、朝霞三キャンパスの全組織を網羅する情報網の構築が必要とされる状況にあり、すでにその計画も進行中である。その一環としての図書館の事務機械化はもはや必須の要請であり、新館完成の時期までに一応のシステムの確立を図るべく、先進他大学に比して遅ればせながらも、すでに汎用マシンおよび関連機器を導入、「学術情報センター」との接続も終了、蔵書の廻及び入力準備も着々と進められている。

進行中のものであるが、今後数年の計画として、次のものを挙げることができる。雑誌管理サブシステムの開発、「学術情報センター目録所在情報サービス」を利用した本学蔵書目録のデータベース化、「学術情報センター情報検索サービス」を利用した情報検索サービスの開始、目録検索サービス(OPAC)の開発・運用、閲覧サブシステム・図書管理サブシステムの開発などである。

他大学に比し数年の遅れを取っているが、逆に他館の経験を活用できる利点もあり、できるだけ早くシステムを確立し、その運用に習熟しなければならない。

3 図書館職員の養成

図書館情報システム化の時代を迎えた現在、システムを円滑に運用するための職員組織の確立、専門的職員の養成は大学図書館界に取って最重要課題の一つとなっている。本学においても、既存の司書規程も含めて、早急な検討が必要である。

4 図書予算

本学図書館の経常的図書費は、公的資料に基づいて同規模私立大学のそれと比較すると、かなり見劣りのする状況にある。この格差は徐々に縮小されるべきものであるが、このことは図書館内部の選書能力・整理能力の向上と密接に関連するものであることは言うを俟たない。

5 書庫

情報システムが確立しても、図書資料の増加は途絶えることはない。新館の収蔵能力は一〇〇万冊が目標であるが、実情は七、八〇万冊に止まるであろう。現在の蔵書数を勘案すれば十分な余裕があるとはいえない。朝霞図書館の書庫のゆとりも大分減少した。工学部分館の書庫は満杯状態である。

書庫の問題は図書館に付き物であるが、将来的には、朝霞図書館地下食堂の書庫への転換が不可能な場合には、朝霞図書館の隣接地に書庫を増築することが望ましいであろう。

6 分館の在り方

分館、特に朝霞分館の在り方は朝霞教学体制の在り方と密接に係わるものであるが、三キャンパスにまたがる本館・分館の微妙な関係についても検討を加える必要があるであろう。

7 個性形成

本学が旧来所蔵している奈良絵本、百人一首等の特殊コレクションの拡充のため、平成元年度以降、一〇年を目処に毎年一点一五〇〇万円程度の奈良絵本を購入し、その他に百人一首のコレクションも毎年充実させつつある。外部機関からの貸出し希望も多く、本学図書館の貴重な財産を形成しつつあるところである。

前述の「個性形成」に係わる文献収集の五年計画は残り二年となっており、第二期の継続に付いて検討を加えるべき時期に来ている。

(山崎正巳)